

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第263集

周防畑遺跡群

若宮遺跡Ⅴ

長野県佐久市長土呂 若宮遺跡Ⅴ発掘調査報告書

2018.3

佐久市教育委員会

例言

1. 本書は、角田美行氏が行う共同住宅建設及び道路整備に伴う周防畑遺跡群若宮遺跡Vの発掘調査報告書である。
2. 調査原因者 角田 美行
3. 調査主体者 佐久市教育委員会
4. 遺跡名及び調査面積 周防畑遺跡群 若宮遺跡V (NWAV) 117㎡
5. 所在地 佐久市長土呂字若宮 1199- 3他
6. 調査期間 平成30年12月10日～21日(現場発掘作業)
平成30年12月25日～平成31年3月(報告書作成作業)
7. 調査担当者 富沢一明
8. 本書及び出土遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。
調査にあたっては、角田美行氏はじめ多くの方々の御理解と御協力をいただき調査が無事終了しました。ここに記して感謝申し上げます。

凡例

1. 遺構の略記号は、住居址(H)・溝状遺構(M)・単独ピット(P)である。
2. 挿図の縮尺については、挿図中にスケールを示した。
3. 遺構の標高は遺構ごとに統一し、水系標高を「標高」とした。
4. 土層の色調は、1988年版『新版 標準土色帖』に基づいた。
5. 挿図中のスクリーントーンは以下のことを示す。



南側発掘調査状況

目次

例言・凡例・目次

第1章 発掘調査の経緯

1. 経過と立地
2. 調査体制
3. 調査日誌
4. 遺構・遺物の概要
5. 標準土層
6. 調査の方法

第2章 遺構と遺物

1. 竪穴住居址
2. 溝状遺構
3. ピット・遺構外出土遺物
4. 調査の成果

写真図版
抄録



第1図 若宮遺跡V位置図(1:50000)

2. 調査体制

調査受託者	佐久市教育委員会	教育長	棚瀬晴樹		
事務局	社会教育部長	青木 源			
	文化振興課長	小林義夫			
	企画 幹	武者新一			
	文化財調査係長	塩川宏幸			
	文化財調査係	小林眞寿	富沢一明	上原 学	
		久保浩一郎	萩原義治	森泉かよ子(臨時職員)	
調査員	赤羽根篤	赤羽根充江	浅沼勝男	木内修一	
	小林妙子	中澤 登	橋詰勝子	橋詰信子	
	堀籠まゆみ	堀籠保子	柳澤孝子	横尾敏雄	
	依田好行	比田井久美子			

3. 調査日誌

2018年 10月23日	角田美行氏より土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出。
10月31日	長野県教育委員会へ市教育委員会より30 佐教文振第 1349-2 号土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知について(副申)
11月 9日	長野県教育委員会より30 教文第7-1321号にて周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について(通知)
11月21日	角田美行氏より埋蔵文化財調査費概算見積依頼が提出。
12月10日	角田美行氏と市教育委員会により埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結
12月10日	記録保存目的による開発対象地の発掘調査を行い、引き続き報告書作成作業を行う。
2019年 3月	埋蔵文化財調査報告書を刊行する。 記録類・出土品を整理保管しすべての業務を終了する。

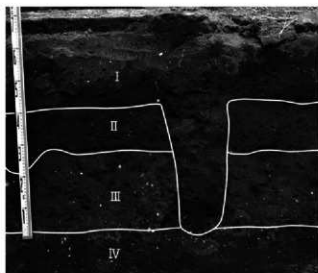
4. 遺構・遺物の概要

遺 構	竪穴住居址 2軒(奈良・不明)	溝状遺構 1本	単独ピット
遺 物	弥生土器(後期・箱清水期)	土師器・須恵器(坏・甕)	鉄製品(刀子)

5. 標準土層

今回の調査地点は南西方向に僅かに傾斜する田切台地上で、基本層序は4層に分かれる。IV層上面が遺構確認面である。確認面深さは地表より60~70cmほどであった。IV層下30cmでP I層である。

第I層	10YR4/1	褐灰色土 耕作土でしまり弱い。
第II層	10YR4/3	にぶい黄褐色土 軽石と小石を含む。
第III層	10YR5/6	黄褐色土 軽石と砂を含むシルト化した土。
第IV層	10YR2/1	黒色土 しまりあり。小粒の軽石を含む。



土層断面(調査区北東角)

6. 調査の方法

遺構調査・遺構測量

住居址は均等に4分割し、対面する2区画を掘り下げ土層の観察・記録を行った後完掘し、床面を精査し、柱穴・カマド等を適宜分割し、土層の観察・記録を行い、最終的に平面の記録を行った。

遺物は分割した各区画に取り上げ、床面上の遺物に関しては連続するNoを付け3次元の記録を行い取り上げた。土坑は長軸方向に沿って2分割し、半裁により土層の観察・記録を行った後完掘した。遺物は遺構Noで一括した。溝址は短辺方向に任意の場所ので区分し、土層を観察・記録した。遺物は区画に取り上げた。遺構外の遺物はグリッド毎に取り上げた。平面図・断面図ともに調査区内に設定した基準杭を利用した遺り方測量により調査担当及び調査員が実施し、縮尺は1/20を基本とした。

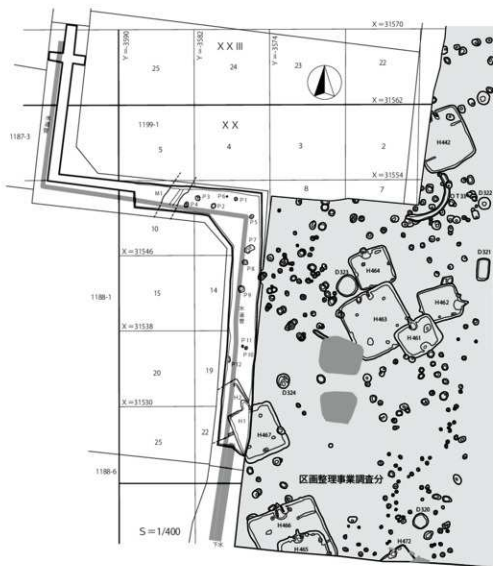
遺構・遺物の整理等

遺物洗浄は竹ブラシを用い手でおこない、室内で乾燥させた。注記は白色のポスターカラーにより行い、薄めたラッカーをその上から塗布した。遺物接合はセメダインCを使用し、遺物復元の際の充当材はエポキシ系樹脂を用いた。遺物実測は手取りで行った。遺物の保管に際しては報告書を台帳として、報告書掲載遺物と未掲載遺物に区分し、コンテナに分類ラベルを貼り収蔵庫に収納した。図面は遺構を1/40で修正、遺物を1/1で実測し、それぞれ仮図版を作成した。

写真・報告書

現場での写真は、デジタル一眼レフカメラによるRAW画質モードと、35mm一眼レフカメラによるカラーリバーサルで同一カットを各々記録した。

遺物写真はデジタル一眼レフカメラで撮影し、EPSデータ形式で報告書に使用した。報告書挿図はアドビ社製の「イラストレーター」で作成し、表についてはマイクロソフト社の「エクセル」で作成した。写真・拓本はアドビ社製「フォトショップ」により補正加工を行った。これらを最終的に「インデザイン」により頁単位で編集し、印刷原稿とした。



第3図 若宮遺跡V調査全体図

第Ⅱ章 遺構と遺物

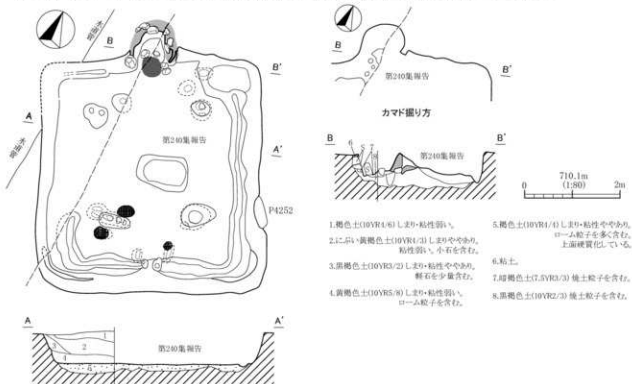
1. 竪穴住居址

(1) H1号住居址

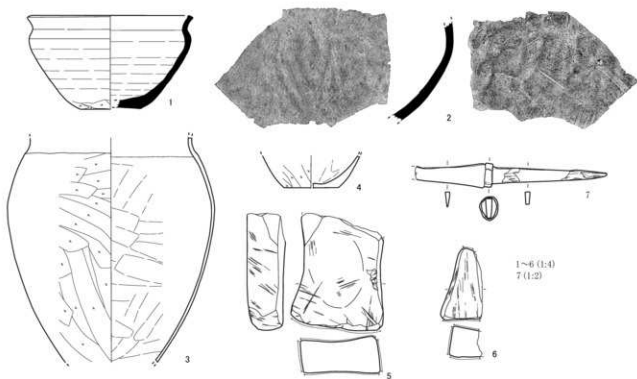
本址は調査区南端で検出された。本址は東側部分が平成24年度に若宮遺跡Ⅳ(佐久市報告書第240集掲載)H467号住居址として部分的に発掘調査が行われている。今回の調査により竪穴住居址の全容が把握できたため、東側の調査部分も含め測量図を提示する。また、出土遺物については新たに発見された遺物については実測図と写真を掲載し、接合復元作業により器形が変わったものについては遺物写真のみ掲載した。

本址は北壁中央にカマドを構築する方形の住居址である。規模は南北の長軸が4.06m、東西の短軸が3.88mを測る。住居床面積は今回3.26㎡調査したことにより全体で14.76㎡となった。壁の高さは西壁で0.64mを測る。ピットは今回一ヶ所検出され、その位置から主柱穴の一つと考えられる。規模は径0.50m・深さ0.24mを測る。カマドは今回の調査範囲が広く、全容を検出できた。構築方法は袖部分が転石と軽石を心材として灰色の粘土で被覆し形を整えていた。煙道部は短く急激に立ち上がるタイプで、火床部はよく焼けていた。また、中央西よりで支脚石と考えられる軽石が検出された。

出土遺物はカマドを中心に出土した。特にH467-26として報告されている土師器羽釜は出土した破片資料が補完されほぼ完形に近い状態となった。今回新たに図示した遺物は7点である。1は須恵器甕であり、1/2程が残存している。2は須恵器甕の胴部破片である。3と4は土師器のいわゆる「武蔵甕」と呼ばれる甕で、同一個体と考えられるが接合しなかった。なお4はH467-24と同一である。5と6は砥石である。いずれも欠損しており全容は不明。7は鉄製品の刀子と考えられ柄部分に木質が一部残存する。本址はこれらの出土遺物より8世紀の第Ⅲ四半期に位置づけられる。



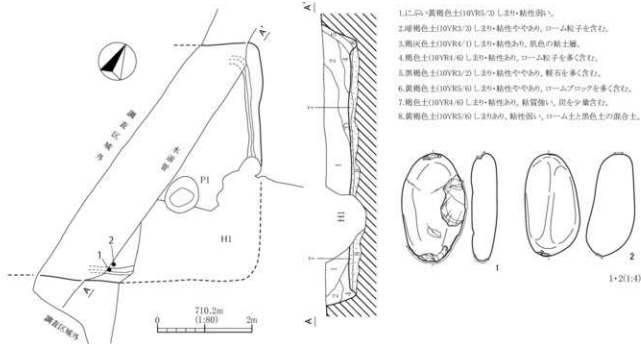
第4図 H1号住居址実測図



第5図 H1号住居址出土遺物実測図

(2) H2号住居址

本址は調査区南端で検出された。H1号住居址と重複関係にあり、本址の方が古い。形態は方形と考えられるが、住居址の西側部分が既存水道管と調査区域外になるため詳細は不明である。規模は東壁が推定で4.70 mを測る。壁高さは南壁中央で0.52 mを測る。ピットは一ヶ所確認され、規模は



第6図 H2号住居址及び出土遺物実測図

1. 灰・黄褐色土(0YR5/7) しまり・粘性弱。
2. 暗褐色土(0YR3/2) しまり・粘性ややあり、ローム粒子を含む。
3. 黄褐色土(0YR4/1) しまり・粘性あり、灰色の粘土層。
4. 褐色土(0YR4/6) しまり・粘性あり、ローム粒子を多く含む。
5. 黄褐色土(0YR3/2) しまり・粘性ややあり、軽石を多く含む。
6. 黄褐色土(0YR5/6) しまり・粘性ややあり、ロームブロックを多く含む。
7. 褐色土(0YR4/6) しまり・粘性あり、粘質強い、炭を少量含む。
8. 黄褐色土(0YR5/6) しまりあり、粘性弱い、ローム土と黒色土の混合土。

1・2(1:4)

径 0.80 m・深さ 0.45 m を測る。東壁と南壁には壁溝が確認された。深さは床面より 0.12 m を測る。床は顕著な貼床が施されており、住居中央部は硬化していた。

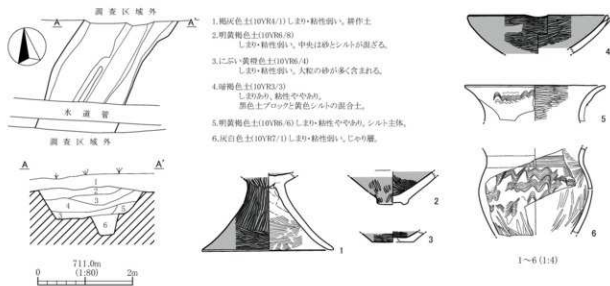
本址からの出土遺物は非常に少なく、土師器片と須恵器片が少量あった。図示したのは敲き石 2 点のみである。これらのことから本址の帰属時期は不明である。

2. 溝状遺構

(1) M1 号溝状遺構

本址は、調査区を北東方向から南西方向に延びるように調査区中央で検出された。規模は幅が 1.50 ~ 1.70 m、検出長さは 1.90 ~ 2.05 m を測る。深さは最深部で確認面より 0.93 m、一段上の部分で 0.44 ~ 0.58 m を測る。溝の形態は中央部分が一段低くなっており、この部分には角が取れた拳大の軽石や砂が細かく層状に堆積していた。

本址からの出土遺物は弥生土器片、土師器片、須恵器裏片が出土した。6 点を図示した。全て弥生時代後期箱清水期のもので、1 は高環脚部、2 は高環部で、脚部をきれいに面取りし高台状の底部としている。3 と 4 は鉢で、4 は片口部が作り出されている。5 と 6 は甕で、櫛描波状文と櫛描篋状文がそれぞれ施されている。本址の帰属時期は、弥生時代の土器群を図示したが、古代の土師器片や須恵器片も出土していることから、古代以降と考えたい。



第7図 M1号溝状遺構及び出土遺物実測図

3. ビット・遺構外出土遺物

今回の発掘調査では 12 個の単独ビットを検出した。調査区幅が狭いため掘立柱建物址を構成する可能性は否定できないが、東の区画整理調査側から広がる建物址は確認されなかった。

遺構外出土遺物として 3 点を図示した。1 は須恵器蓋であり、天井部に自然釉が確認できる。2 は土師器環であり、内面黒色処理されている。3 は同じく土師器環であるが、内面見込み部に螺旋状風の暗文が施されている。

4. 調査の成果

今回は 117 m² という限られた面積の発掘調査であったが、若宮遺跡全体を考える上で大きな 2 点の成果があったと考えられる。

1 点目として、「集落域の範囲」である。今回、M1 号溝状遺構を挟んで西側では住居址の確認はできなかった。このことは若宮遺跡全体に広がる古墳時代から奈良・平安時代の集落域がこの周辺で

終わることが予想できる。溝址より西側はⅢ層の砂とⅣ層の黒色土が厚く堆積し、西側に傾斜する低地状の地形が広がり集落域には適さなかったのではないだろうか。2点目は「記録の補充」である。前述の通りH1号住居址のように過去の調査成果を補充し、より完全に近いかたちで記録が残せたことは、「記録保存目的による発掘調査」として重要な調査成果の一つと考えられる。以上雑駁ではあるが調査のまとめとしたい。

第1表 ビット計測表

() 推定 < > 残存 (単位 cm)

No.	横出位置	長さ	短径	深さ	形 状	出土遺物	備 考
P1	XX 9	32.0	30.0	8.0	円形	焼灰色土 (10YR4/1) 軽石を多く含む	
P2	XX 9	52.0	47.0	28.0	円形	焼灰色土 (10YR4/1) 軽石を多く含む	
P3	XX 9	52.0	48.0	43.0	円形	焼灰色土 (10YR4/1) 軽石を多く含む	
P4	XX 10	38.0	40.0	38.0	楕円形	焼灰色土 (10YR4/1) 軽石を多く含む	
P5	XX 9	38.0	36.0	28.0	円形	焼灰色土 (10YR4/1) 軽石を多く含む	
P6	XX 9	20.0	16.0	3.0	楕円形	焼灰色土 (10YR4/1) 軽石を多く含む	
P7	XX 9	104.0	60.0	63.0	不整形	土師 甕 6片 赤生 甕 1片	焼灰色土 (10YR4/1) 軽石を多く含む
P8	XX 14	<48.0>	<52.0>	83.0	-	-	焼灰色土 (10YR4/1) 軽石を多く含む
P9	XX 14	<46.0>	70.0	34.0	-	赤生 甕 1片	焼灰色土 (10YR4/1) 軽石を多く含む
P10	XX 19	60.0	60.0	18.0	円形	-	焼灰色土 (10YR4/1) 軽石を多く含む
P11	XX 19	48.0	44.0	10.0	円形	-	焼灰色土 (10YR4/1) 軽石を多く含む
P12	XX 19	120.0	48.0	24.0	-	-	焼灰色土 (10YR4/1) 軽石を多く含む



第8図 遺構外出土遺物実測図

() 推定 < > 残存 (単位 cm)

第2表 出土遺物観察表

H1	種 別	器 種	法 量			成形・調整・文様		備 考	出土位置		
			口 径 (長)	底 径 (幅)	器 高 (厚)	内 面	外 面				
1	須忠器	甕	(17.6)	(6.4)	10.0	ロクロナデ	ロクロナデ 底部、底部周縁ヘラケズリ	回転実測	I区		
2	須忠器	甕	-	-	-	ロクロナデ	当て具痕→ナデ	ロクロナデ タタキ	断面実測	カマド	
3	土師器	甕	-	-	<24.0>	ヘラナデ→口縁ヨコナデ	ヘラケズリ→口縁ヨコナデ	回転実測	I区 カマド		
4	土師器	甕	-	(5.8)	<3.4>	ヘラナデ	体→底部、ヘラケズリ	回転実測	I区・H467		
	種 別	表 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考				
5	礫石	石	<12.5>	<9.8>	<3.9>	<683.41>	上部欠損 砥面数5	正裏と下側に条痕	I区		
6	礫石	石	<7.6>	<4.5>	<3.3>	<130.97>	右側欠損 砥面数5		I区		
7	刀子	鉄	<10.2>	1.3	0.4	<11.15>	黄金具厚さ0.1	柄部分に木質残	II区		
H2	種 別	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考		出土位置		
1	礫石	石	11.4	6.7	2.7	292.51	両端部と右側縁辺に最打痕				
2	礫石	石	10.9	5.8	4.7	418.65	両端部に最打痕				
M1	種 別	器 種	法 量			成形・調整・文様		備 考	出土位置		
			口 径 (長)	底 径 (幅)	器 高 (厚)	内 面	外 面				
1	赤生	高杯	-	(13.9)	<8.2>	環部	ヘラミガキ→赤彩	ヘラミガキ→赤彩	完全実測		
2	赤生	高杯	-	3.3	<3.5>	脚部	ヘラミガキ→赤彩	ヘラミガキ→赤彩 脚部欠損→擦り加工	完全実測	転用の可能性	
3	赤生	鉢	-	(4.4)	<1.2>	ヘラミガキ→赤彩	ヘラミガキ→赤彩	体→底部	ヘラミガキ→赤彩	回転実測	
4	赤生	鉢	(14.8)	-	<4.1>	ヘラミガキ→赤彩	ヘラミガキ→赤彩	ヘラミガキ→赤彩	回転実測		
5	赤生	甕	(14.8)	-	<3.8>	ヘラミガキ	櫛描波状文	櫛描波状文	回転実測		
6	赤生	甕	-	-	<9.2>	ヘラミガキ	ヘラミガキ	櫛描波状文 頸部に10本 1組3連止めの櫛描波文	回転実測	内面に赤色部分あり	
Gr	種 別	器 種	法 量			成形・調整・文様		備 考	出土位置		
			口 径 (長)	底 径 (幅)	器 高 (厚)	内 面	外 面				
1	須忠器	蓋	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	天井部回転ヘラケズリ	回転実測	ケン	
2	土師器	杯	-	-	-	ヘラミガキ→黒色処理	ナデ	底部ヘラケズリ	回転実測	XX 22	
3	土師器	杯	-	-	<6.3>	ナデ→暗文	ヘラミガキ		断面実測	ケン	

図版 1



右上 調査区西側全景
(東より)

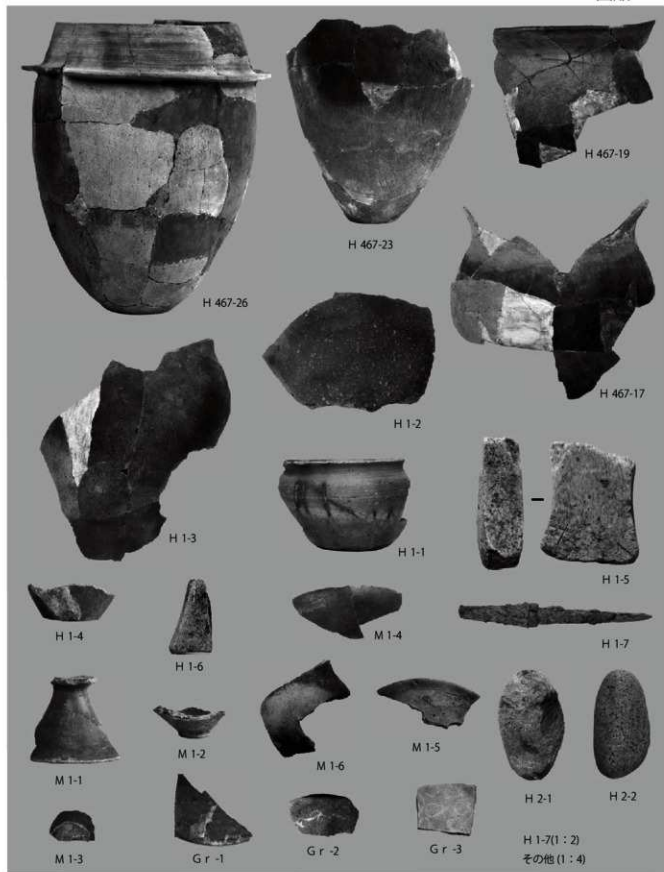
左上 調査区南側全景
(南より)

左下 H1・2号住居址

右中 H1号住居址カマド

右下 M1号溝状遺構
(北より)





報告書抄録

ふりがな	すぼうばたいせきぐん わかみやいせきご							
書名	周防畑遺跡群 若宮遺跡V							
副書名								
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第263集							
編著者名	富沢 一明							
編集機関	佐久市教育委員会 社会教育部 文化振興課							
所在地	長野県佐久市中込2913 TEL0267-63-5321 FAX0267-63-5322							
発行年月日	2019年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
すぼうばたいせき ぐんわかみや いせきご 周防畑遺跡群 若宮遺跡V	さくしながとろ あざわかみや 佐久市長土呂 字若宮1199-3 他	20217	7	36°17.03	138°27.36	20181210 ～ 20181221	117	共同住宅 建設及び 道路整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
周防畑遺跡群 若宮遺跡V	集落址	奈良	住居址 2軒 溝 址 1本	弥生土器・土師器 ・須恵器・鉄製品 ・石製品				
要 約	台地上に展開する古代の集落の一部分を調査した。周辺の調査事例と同様に古墳時代～平安時代の堅穴住居跡が検出された。また、調査区西側にかけては、P1ローム層が西側の田畑低地に向かって落ち込み、当該調査地点周辺が集落域の西側境界と考えられた。							

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第263集

周防畑遺跡群 若宮遺跡V

2019年 3月

編集・発行 佐久市教育委員会

〒385-8501 長野県佐久市中込3056

社会教育部 文化振興課 文化財事務所

〒385-0051 長野県佐久市中込2913

TEL0267-63-5321

印刷所 キクハラインク株式会社